

「ゲームに逃げた男の末路」

(00:00)

なんでだよ……たかがスマホゲームだったはずなのに……なんでこんなことに……

俺の名前は斉藤健太。32歳、営業職。
ストレスフルな毎日を、スマホゲームが癒してくれる唯一の時間だった。
「クソ……またクレームかよ……やってらんねえ……」
通勤電車でも、昼休みでも、帰宅後も。
指がスマホから離れることなんて、なかった。

「健太、今日もまた夜ごはん食べながらゲームしてるの？」
「別にいいだろ。誰かに迷惑かけてるわけじゃねえし」
「……遥斗(はると)もいるんだよ？目の前でずっと画面見せて……影響よくないよ」「だったらお前がなんとかしとけよ。俺はもう疲れてんだよ」

俺には2歳の息子、遥斗がいる。
可愛いとは思ってた、最初はな。
でも仕事から帰ってきて、騒がしい子どもの相手なんて、正直やってられなかった。

(01:24)

「ねえ、たまには遥斗のお風呂入れてあげてよ」
「無理、今イベント中で時間限定なんだよ」
「は？ たかがゲームでしょ」
「“たかが”とか言うなよ。こっちは命かけてんだよ」

命かけてたのは……ゲームの中の話だけどな。
現実？ そんなもんクソゲーだ。
レアドロップ一つの方が、はるかに価値があるって思ってた。

妻の沙織は、俺に呆れて何も言わなくなった。
そのおかげで、気兼ねなく課金もできるようになったしな。
「ふふ……限定キャラ引けた。最高」
金が消えていく感覚なんて、もうなかった。

(02:42)

そんなある日のこと。
沙織が友達の家に行くことで、俺が遥斗を一人で見ることに。
「お願いね？ゲームは控えて、ちゃんと遥斗見てて」
「うるせえな。わかってるって。任せとけ」

……任せとけて言ったそばから、俺はゲームに夢中になってた。
ボス戦が始まったんだ。見逃せるかよ。

「パパー……」
「ちょっと静かにしろって、今大事なことなんだよ！」

気づけば1時間。遥斗は……静かにリビングの床に倒れていた。
「え？は？おい遥斗！おいっ！なんで……動かねえ……！」

俺は慌てて救急車を呼んだ。
その後、沙織も駆けつけてきて……
「どうして目を離したの！？ゲームしてたの！？信じられない！！」
「ち、違う……ちょっとだけだったんだ……」

(04:05)

病院の医者は言った。
「お子さんは、キッチンにあった洗剤を誤飲したようです。意識は…まだ戻っていません」

……なんであんなところに……
いや、違う。
俺が見てなかったからだ。

沙織は、それ以来俺に一切話しかけなくなった。
遥斗は……今もベッドで眠ったままだ。

(05:00)

そして数日後、沙織から差し出された一通の書類。

「離婚届よ」
「ちょ、ちょっと待て……まだ遥斗だって……」
「もう遅いの。あなたが家族を大事にしなかったから、こうなったの」

あの時、スマホを置いていれば。
ゲームじゃなく、現実を見ていれば。

俺は……息子も、妻も、全部失った。

(05:50)

……なのに、手元のスマホだけは、変わらず光っている。
「新イベント開催中！ログインボーナス受け取り期限まで、あと5分です」
……なんで、こんなもののために……

ここまで見たお前は、まだ戻れる。
家族よりゲームを優先するようになったら、もうおしまいだ。